

紀要23号の刊行にあたって

本研究センターでは、「広く学際的視点にたった人間関係研究」を研究目的として掲げています。多数の公開講座を開催するなど、研究成果の社会還元も重視しており、発表の場として毎年、紀要を刊行しております。

今回の紀要第23号では、「多様性」をテーマに特集を組みました。円安が進んだこともあり、日本を訪問する外国の人々が増加しています。多様な価値観や文化、宗教を背景とする移民の方々も、身近な存在となってきました。国民自体も多様化が進んできているわけです。しかし、日本より先行してすすんで移民を受け入れてきた欧米諸国では、住民の反発やトラブルも頻発しています。外国から来た人たちが自国での習慣を引きずって、住民と摩擦を起こすからです。多様性は確かに国力の源ともなる一方、受け入れる側にはそれなりの覚悟も必要なのでしょう。画一性は弱点にもなりますが、だからと言って急に多様化が進むと、発生する摩擦によって、社会は不安定化するかもしれません。現代社会では、多様な人々の間の人間関係についての研究が、ますます重要になっているのです。

特集テーマである多様性に関しては、森泉先生の「ダイバーシティと多様性をめぐる言説の行方」、池田先生ほか共著の「LGBTQ+当事者に対して大学生が抱く関心内容および当事者による講演会の効果についての探索的検討」などの論文を掲載しています。我田引水ながら私自身も、学校教育における画一的な一斉指導と多様なニーズに応じる個別指導の問題を考察しています。文科省は先日、不登校の児童生徒を対象とする「不登校特例校」を、「学びの多様化学校」と名称変更すると発表しました。学校教育も多様化への対応が試みられているわけです。

他にも本23号では、Articleで「ワークショップ形式によるプロテスタント教会の修養会に関する実践報告と検討」、資料として「日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト（2022）」、また講演会の逐語録も掲載しています。本年1月にセンターでは、映画監督でテレビ局にお勤めの高木佑透さんを招いて、映画上映会・講演会をおこないましたが、その記録です。

ご一読を頂き、ご感想などお寄せ頂けると幸いです。

南山大学人間関係研究センター長 宇田 光